の種の生息状況調査を行なっていた際に，岩の表面に一見ヨシトミダルマガムシ *Hydraena yoshitomii* Jäch et Diaz, 1999 に似た小さなダルマガムシが張り付いているのに気がついた（図 4）．その時は本種であると気づかずに採集し，帰宅後自宅で顕鏡したところ，別の種であることがわかった．形態的特徴から本種と同定したが，既知の生息環境と異なることから，近縁の別種である可能性も考え，すぐに吉富博士に同定を依頼した．標本をご確認していただいた結果，やはり本種であったことが判明し，その際に内陸部ではこれまで記録が無いと思われる旨の知見についてもご教示いただいた．生息範囲を確認する必要があると思われたので，現地に再度調査に訪れたところ，その範囲は極めて狭く，直線距離で 10 m 程度であり，個体密度は比較的高いものの，河川改修などの環境改変が行なわれれば容易に消滅する可能性のある個体群であることが明らかとなった．その後，荒川流域では同様の環境をしらみつぶしに調査しているが，現在のところこの場所以外では確認されていない．

あくまでも筆者の想像ではあるが，本種が海岸から遠く離れた関東地方の内陸部で生息しているというこの状況は，古い時代に秩父が海岸沿いであったときの生き残りなのではないか，あるいはこれまで調査不十分であっただけで，実は内陸部でも同様の環境があれば他にも生息している可能性があるのではないかなど，いろいろと考えてしまう．このため，本種の生態を解明する上での興味深い知見が得られたと自負している．

また，今後の調査成果次第ではあるが，本種の埼玉県内における生息状況によっては，地域のレッドリストに加える必要もあると考えている．

末筆ながら，標本を同定していただき，発表を薦めてくださった愛媛大学の吉富博之博士に厚く御礼申し上げる．

引用文献

菅谷和希，2009．セスジダルマガムシ属 2 種を千葉県の海岸部より採集．月刊むし，(465)：46−47.

吉富博之・松井英司・佐藤光一・疋田直之，2000．日本産セスジダルマガムシ属概説．甲虫ニュース，(130)：5−11.

（新井浩二 355-0216 比企郡嵐山町むさし台 3-22-13）

【短報】鳩間島（沖縄県）のゴミムシダマシ類採集記録

沖縄県八重山郡竹富町の鳩間島においてゴミムシダマシを採集した．この島のゴミムシダマシ類について全く記録が見られないので，短期間の調査であるが報告しておく．

鳩間島は八重山郡竹富町に属す面積 1.01 km²，標高 33.8 m の小島で，西表島の北 5.4 km に位置している．島の大部分が農地と放置された草原であるが，中央部の丘陵には宗教的な意味合いから，狭いがよく管理された森が残されている．採集はタタキ網と夜間の目視とで行った．採集個体は林縁と村落周辺で獲られたものが多い．

1．ツヤスナゴミムシダマシ *Diphyrrhynchus iriomotensis* M. T. Chûjô

6 exs., 6. VI. 2008.

既産地：石垣島，西表島，竹富島；台湾.

2．コヒラスナゴミムシダマシ *Diphyrrhynchus shibatai* Kaszab

1 ex., 5. VI. 2008.

既産地：奄美大島，宮古島，来間島，西表島，与那国島；台湾，フィリピン.

3．ヤマトスナゴミムシダマシ *Gonocephalum coenosum* Kaszab

1 ex., 5. VI. 2008.

既産地：トカラ列島以南，与那国島，尖閣諸島まで；台湾，中国大陸からシベリア南東部まで.

4. ヒメオオニジゴミムシダマシ *Euhemicera hajimei* (Masumoto)

1 ex., 6. VI. 2008.

既産地：奄美大島，石垣島，西表島，竹富島，与那国島.

5. サキシマオオニジゴミムシダマシ *Euhemicera sakishimensis* (M. T. Chûjô)

2 exs., 6. VI. 2008.

既産地：沖永良部島，久米島，宮古島，来間島，石垣島，西表島，竹富島，与那国島；台湾.

6．カラカネチビキマワリモドキ *Tetragonomeus palpalcides* (Nakane)

1 ex., 4. VI. 2008

既産地：九州，屋久島，薩摩黒島，トカラ列島以南，与那国島まで，大東諸島 .

7. ニジマルキマワリ *Amarygmus cuprarius* (Weber)

9 exs., 4. VI. 2008.

既産地：石垣島，西表島，竹富島，黒島，波照間島；台湾，中国南部，ベトナム，ラオス，タイ，マレー半島，スマトラ，メンタウエイ諸島，ボルネオ，ジャ

ワ，フローレス，オーストラリア．

本種は *A. callichromus* Fairmaire と同一種で，この種名で用いられる場合の分布地は八重山諸島と台湾のみが記されているが，本来はきわめて広域に分布している．

既産地からみると採集した種はいずれも近隣の石垣島や西表島からも記録されているもので，この島固有の種はみられなかった．また台湾との共通種が多い．

末尾であるが，報告に当たり益本仁雄博士に同定いただいたことを明記して厚く御礼申し上げる．

引用文献

東　清二（監修），2002，琉球列島産昆虫目録，沖縄生物学会，240−247.

Bremer, H. J. & K. Ando, 2009. A New Species of *Amarygmus* Dalman, 1823 from Japan (Coleoptera: Temebrionidae: Amarygmus) Entomological Review of Japan, 64(1): 11−18.

（楠井善久　643-0004　有田郡湯浅町大字湯浅1043）

【短報】屋内で同所的に確認されたヒラタキクイムシとシロオビカッコウムシ

ヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* (Stephens, 1830) は，建材等に用いられるナラ，カシ，シオジ，キリ，タケ，ケヤキ，ラワンなどを加害する著名な乾材害虫の一種である（日本ペストコントロール協会，1987）．一方，シロオビカッコウムシ *Tarsostenus univittatus* (Rossi, 1792) は，ヒラタキクイムシの捕食性天敵として知られており，成虫幼虫ともにヒラタキクイムシを捕食するといわれる（黒澤ほか，1985；宮ノ下ほか，2004）．しかし，両種が同時に発見される機会はまれであり，具体的なデータを伴った記録は宮ノ下ほか（2004）などの僅かな報告があるのみと思われる．

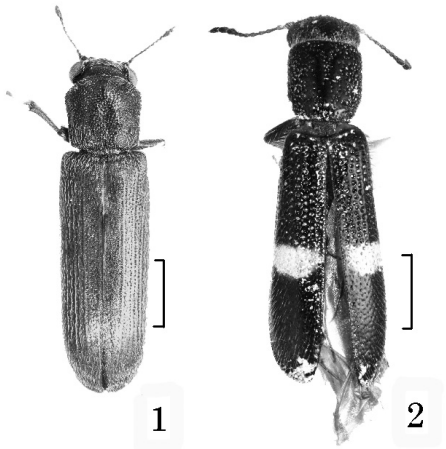

図1．ヒラタキクイムシの全形．図2．シロオビカッコウムシの全形．図1−2のスケールバーは，共に1.0 mm.

筆者は，屋内において同所的に得られた両種の記録を有するため，以下の通り報告して状況についても言及したい．同定については，ヒラタキクイムシは日本ペストコントロール協会（1987），黒澤ほか（1985）を併用し，シロオビカッコウムシは黒澤ほか（1985）を用いた．なお加害物件への配慮として，詳しい産地は伏せることとする．

記録

ヒラタキクイムシ *Lyctus brunneus* (Stephens, 1830)（図 1）：13 頭，新潟県長岡市，12−VII−2011，深田純採集，岩田泰幸保管．

シロオビカッコウムシ *Tarsostenus univittatus* (Rossi, 1792)（図 2）：1 頭，新潟県長岡市，12−VII−2011，深田　純採集，岩田泰幸保管．

ヒラタキクイムシは，住宅 1 階脱衣場の床板外材（ラワン）より多数の発生が見られ，材の表面には脱出孔（直径 2 mm 内外）を多数確認した（図 3）．この物件は, 2011 年の時点で築 4 年目にあたり，ヒラタキクイムシ成虫の発生は 2009 年から毎年 6 ～ 8 月位の時期に確認されていた．2011 年には大量の成虫発生が確認されたため，弊社へ調査依頼が舞い込んだ．仲介の工務店によれば，捕獲した個体は記録した 13 頭のみであるが，実際に目撃した発生個体はかなりの頭数に及んだとのことである．

シロオビカッコウムシは，捕獲されたヒラタキクイムシの検体に混じって持ちこまれ，両種は同所にて得られた．

現場より持ち帰られた加害痕のある木片（11

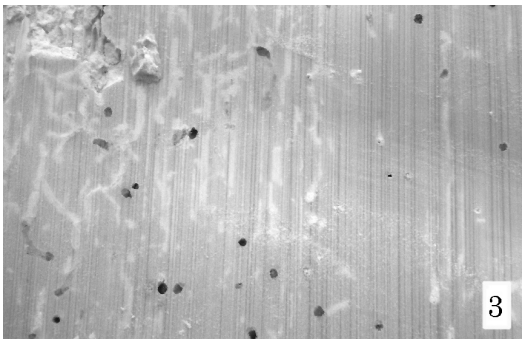

図3．ヒラタキクイムシの発生が見られたラワン材.